

(二二九) 甲賀組と伊賀組

徳川時代に、甲賀組と伊賀組と言ふ侍組があつて、駿河臺の甲賀町が甲賀組、四谷の伊賀町が伊賀組の組屋敷であつた。之等の組に屬する人々は、探偵専門で、忍びの術と言ふことをも心得て居たやうに、世間から思はれて居た。忍術と言ふのは黒い装束を着て、黒板塀に張り着いて居れば、カムフラージして人の眼を瞞すと言ふやうな平凡な事ではなくて、芝居の仁木彈正がするやうな、不思議な事をなし得ると信ぜられて居た。併し、そんな事は勿論、嘘だが、何故、此處の人を徳川が探偵組として抱へて置いたかと言ふに、海路伊勢に上陸するものと、東海道中仙道及北陸道から上つて來る人との、接觸すべき最も多くの機會を持つて居る場所だからだ。即ち、諸國の政治的情報を集めるのに、最も便利な地方であつたから、徳川が天下を統一する前から此地方の人を軍事上の偵察にも、政治上の探偵にも、始終使つて居た。殊に、家康が、江戸城へ退いてからは、京畿の情報を知る事が最も大切であつたから、甲賀伊賀兩地の報告が最も政治的に重用されて居たのだ。併し、政治の中心が江戸に移つてからは、甲賀郡と伊賀郡とに情報部を置く必要がなくなつたので

之等兩組を江戸に移すやうにしたのだ。

(二三〇) 戦上手の氏郷と高虎

江州から大勢、偉い人が出て居るが、智勇の最も優れた人と言へば、第一に指を蒲生氏郷と藤堂高虎とに屈したい。氏郷は、蒲生郡日野城主の子であつたから、武人として乃至、支配階級者として立派な血が流れて居たのだが、高虎に至つては、相當の系圖位は、其後になつて作つてもあらうが、江州の一土民の子であつた。どうして之程の人が土民の子に生れたか、そう言ふ偶然の出來事は何處にもあるから珍らしくないと言へもするが、實は江州そのものゝ雰圍氣が、氏郷をも高虎をも生んだのだ。奥州や九州の片田舎に生れては、どんな天才でも、環境が悪いから偉くなれぬ。江州のやうな、京都や比叡山を控へて各國に通ずる各道の咽喉部を握つて居る所では、政治、經濟及軍事に關する情報が、何んでも分るので、此處に居る人は、種々な刺戟を受けるから、頭の磨かれるのは勿論、武藝でも軍略でも、それ〴〵研究しやうと言ふ氣になるのだ。氏郷や高虎が、偉くなつたのも、斯う言ふ環境からであるのは勿論だ。併し、一國一城の主となつて、偉名を輝さうと思

ふには、獨天下では出来るものではない。家來を澤山持つて居なければならぬが、それも大將株のみでは、何も出来ぬ。仲間小者の末に至るまで、氣が利いた人を得て居なければならぬ。江州商人の手先となつて、働いた馬方も居れば、人足も居る、行商をしながら國々の景氣を聞き廻つた人も居るから、斯う言ふ人は、取り敢ず軍事探偵に使ふ事が出来る。兵糧の買入や小荷駄の運送などは商人としては、お手のもので、馴れきつて居る。所々の關所を越えるには、役人に袖の下を使ふと言ふ事も知つて居るから、手形を買収する行り方も心得て居る。商人の用心棒として、武勇を現はした人の外に、こんな人も大勢居たのだから、江州出身の氏郷や高虎は、何時も戦が上手であつたのだ。

織田信長は、尾濃の人を率ゐて天下を席捲したのであつたが、豊臣秀吉は、尾濃の人の外に、江州人を召抱へて經濟の事に當らせた。現に、五奉行中の三人までが、江州人であつた。それは、坂田郡の石田三成、栗太郡の長束正家、東城井郡の増田長盛だ。太閤が小田原の北條を征伐する時、長束と増田が軍需品の輸送を擔當して功があつた。征韓役の時には、三成の兄、石田正繼が肥前名護屋の本營にあつて、糧食輸送の事を掌つて居たと言ふ事が歴史に書いてある。畢竟、江州人には之等の人達の外に、地方財政、金穀出納、貨物輸送などの事に熟達して居た人々が澤山居て、五奉

東海平
り筋
味さう
ある

行の部下となつて、働いたのだと考へられる。現に、長束正家は、數學の達人であつたと言ふから太閤檢地、即ち三百坪を一反として全國の田畑を丈量せしむる爲めに長束一派の數學者を、江州に求めて之を成功せしめたのであると見たいのだ。賤ヶ岳の七本槍として、驕名を轟かした片桐助作は、加藤福島に劣らぬ勇士ではあつたが、晩年に於ては秀頼の傳となつて、大阪と江戸との間を幹旋した。成功者にはなれなかつたが、單に一武辯の人でないと言ふ事は、此一事でも分る。

要するに、江州は文化の中心地に入り込む可き咽喉の地にあつたから、武勇の人も智略の人も、行政人も、商人も、偉い僧侶も、偉い茶人も、續々出て居るのだ。昔、天智天皇が都を志賀に開いて、その跡は見る影もなく荒れはてたと言ふものゝ、當時に蒔いた文化の種子は、知らず識らずの間に、江州人の血の中に數百千年間、流れて居たのだ。

(一三一) 猿丸太夫は弓削道鏡

百人一首の中で、猿丸太夫の歌程、人口に膾炙して居るものはない。それは紅葉と鹿とを秋に配合して、如何にも無技巧に出來て居るからに違ひない、其上に、猿丸太夫と言ふ名前が、既に滑稽

で、無邪氣なところがある。それだから、太閤秀吉が、連歌の席で『奥山に紅葉ふみ分け鳴く螢』と言つて一座の物議を起したが、細川幽齋は『武藏野の篠つく雨の草の中、螢より他に鳴く虫はなき』と言ふ古歌があるから、螢も鳴かぬとは限らぬと言つて、秀吉を窮地から救つたと言ふ落語すら出来て居る程だから、猿丸太夫は、何時頃の人か、如何なる経歴があるのか、生れ故郷も、終焉の地も、頓と分つて居ない。歌人であるとは言ふが、その歌も奥山の歌が一首残つて居るだけで、他にはない。徹頭徹尾一のスフィンクスであると言はれ得る。然るに、瀬田川の右岸で名高い獅子飛のある邊から山手へ入つて行つたところに、岩屋と言ふところがある。此處に大きな岩があつて其上に松が生へて居る、此處を奥山と言つて居るから、猿丸太夫が奥山に紅葉ふみ分けの歌は、此處で詠んだのだらうと言ふ説がある。此處は、近江と山城の境だから、鴨長明の方丈庵を造つた日野山の方から登つて來られる。それだから、方丈記の中に、『田上川を渡り、猿丸の墓を尋ね』と言ふ事が書いてある。『無名抄』に『曾東』と言ふところに猿丸太夫の墓があると書いてあるが、曾東村は元、奥山田庄であつたと言ふから、鴨長明の尋ねた猿丸太夫の墓も同じものであつたに違ひない。併し『前々太平記』に猿丸太夫は弓削道鏡その人であると言ふ事が書いてある。此説に據ると道鏡は元、威勢のよい氣高い大臣であつたが、孝謙女帝の寵愛を專にして遂に帝位に望をかけて居

る事が露見したので、下野の薬師寺に流される事になつた。然るに、昨日までも權威嚇々たる大臣として、朝野の信望を繋いで居たのに、一の僧官として薬師寺などへ、オメ／＼と行かれるものではないと言ふので、田上の別業で三年間、女帝の喪を終り、其間に髪を伸ばして、名前を猿丸太夫と改めたのだと言ふのだ。この説の如きは、最も奇抜で、最も愉快だが、他に更に一説がある。それは厩戸皇子の子に弓削王と言ふのがある、其子に猿丸太夫と言ふのがあると言ふから、弓削道鏡其人は、聖德太子の孫である。従て女帝の恩寵に忤れて帝位を潛望した言ふ事は不届至極には違ひないが、並々の平民共が帝位を覬つたのとは、少し譯が違つて居るとも言はれ得る。併し、孝謙帝崩御の後は、其御後を弔ひ奉る爲めに、並の人でも坊主になるべきを、態々、髪を長くして俗人になつたと言ふ事は、聊か心得違ではあるまいか。

(一三三) 近江出身の特殊人物

江州程、毛色の變つた人物を出して居るところはない。古い頃の學者では、小野妹子が居る。徳川期になつては、中江藤樹は、所謂近江聖人で、他の地方に類例のない學者だ。文學者としては、

近江出身の特殊人物

北村秀吟や、山崎宗鑑が出て居る。俳句の方では、其角も江近の人の息子で、許六も居れば、文章も居る。流石に、芭蕉が遺言して遺骸を葬らした丈け、事はある。歌人では、大伴黒主や猿丸大夫がある。繪畫の方では狩野山樂が偉いが、鳥羽僧正に至つては、一流の開祖で、世界的の畫工であるとも言はれる程の手腕家だ。尙、其上に、此人は、比叡山延略寺の座主になつたが、三日で止めてしまつたと言ふ奇行に富んで居るから、畫風が剽逸である。大石義雄の祖父も亦、江州の人だ。宗教家としては、最澄のやうな偉い人が始めに出て居るから、後から／＼立派な人が澤山出て居る。其中でも、慈覺大師、一に元三大師と言はれる。此人は、淺井郡の人で比叡山中興の大豪傑であるのだ。こんな人よりは、最つと偉い宗教家が出て居る。それは鷲に攫はれて圖らずも奈良の杉の木の上に落されたと言ふ傳説をもつて居る良辨僧正、その人である。我國の佛教は、聖徳太子によつて、大に發展したのではあるが、奈良朝に於て、佛教をして長足の進歩をなさしめた豪傑は、實は良辨であるのだ。美術鑑賞方面に至つては、小堀遠洲が第一人者であるが、古筆了佐も亦、一流の開祖であるのだ。豊臣家の五奉行になつた長束正家は、江州出身の數學者で、名を揚げて居るが數學の上手な人は、長束ばかりではない、其頃より以來、いくらかも居たやうだ。畢竟江州商人が各地に行つて成功して居ると言ふのも、算數に達して居る人が、一般に多かつたと言ふ事を證明し

て居るのだ。斯う言ふやうに、數へて來ると、武人としての蒲生氏郷や片桐且元、政治家としての藤堂高虎や石田三成などは、寧ろ平凡人で、物珍らしく、嘸し立てるにも及ばぬやうな氣がする。併し、木村重成だけは男振がよいので、『柳の枝に櫻を咲かせ梅の香ひを持たせた』やうなと言はれて芝居でも講釋でも、大持ての人物だ。何しろ、勇氣もあれば外交談判も出來ると言ふ事だから、近江出身武人中の異彩と見られ得可きだ。

婦人の側を見ると、坂田郡の人で、美人の代表者として、古來、この人の右に出るものはないと言はれる衣通姫が居る。芝居でする近江のお兼、實は高島の大る子と言ふ腕力家も亦、巴御前や盤額女よりも、一枚上の怪力女だ。而して、最も振つて居るのは東淺井郡から出て居る祇王祇女だ。此人は、今様の舞を舞つて清盛の寵を得たと言ふのだから、今日の藝者のやうに思つて居たが、決してそんなものではない。彼女達の郷里に灌慨の便がないので、用水堀を堀るべく清盛に請願する積りで、親子連れ立つて京都に行つたが、圖らずも清盛の寵愛を受くるやうになつたので、其機會に用水の話を持ち出したところが、幸にそれが聞き届けられて、宿望を達する事が出來た。今の野州郡の祇王村の大半に引いてある用水は、當時の祇王川から疎水せられてあるのだと言ふ事だ。其後祇王が、加賀の田舎から出て來た佛御前に寵を奪はれたので『萌え出るも枯るゝもおなじ野邊の

草、いづれか秋にあはで果つべき』と言ふ歌を障子に書き残して、嵯峨野へ逃げ出したと言はれて居るが、之は、畢竟當時の文士の作り事で、實際は、清盛の寵が衰へたのを幸に、郷里へ歸つ、無事に聲でも貰つたのに違ひない。そう言ふ史實が傳つて居らぬのは、聊か残念だが、今日の祇王村が彼女達の勢力で出来た事を思へば、並々の白拍子とは、全然違つた人で、現に、祇王村には祇王堂と言ふのがあつて、祇王姉妹の木像が祭つてあると言ふ事だから、斯う云ふ種類の女の中で、最も異彩を放つて居る變種と見る可きだ。尙、建築家として偉い人が出て居ないやうだが、實は其名が普遍的に聞えて居ないだけだ。それは坂本の人、僧詮舜と言ふので、秀吉の命によつて五條橋や瀬田唐橋を造り、叡山の再建に従事し、それがすんでから、伏見城の建築土木工事に參與して居ると言ふやうな人も居るのだ。

(一三三) 江州が生んだ茶道の天才

江州からは、色々變つた人が出て居るが、利休以後、茶道の第一人者と言はれて居る小堀遠江守政一も亦、北江州東淺井郡小堀村の人だ。祖父は小堀勘解由左衛門政治で、父は新助正次で、何れ

も小堀村に住んで居た。父新助正次は、羽柴秀吉に仕へて、軍功があつたので、五千石を領して居た。其子の新助政一も亦、秀吉に仕へて茶道を以て寵遇せられて居た。其後、徳川家に屬して、上方郡代となり、更に伏見奉行を兼ねて居て、東淺井郡小堀村に封じて一萬石を興へられ、遠江守に任ぜられた。古田織部に茶事を學んで、書もよく書くし、歌も上手であつた。古い物の鑑定に至つては、當時、誰も及ぶものがないので、此人の評價によつて茶器の値段が高低するやうになつた。晩年に孤蓬庵宗甫と言つて遠州流茶道の祖となつて居る。今日、茶道の方で、中古名物と言はれるものは、何れも小堀遠州の鑑定選別したものだ。如何に此人の鑑定眼が高かつたかが窺はれる。併し、小堀遠州のやうな趣味上の天才が、どうしてこんな片田舎から出たのか。千利休が泉洲堺浦から出て居るのは、極めて自然であるが、北江州でも東淺井郡と言へば、京都からも遠いので、中央文化の普及區域ではないのだ。天才は孤立して生れるやうに思つて居る人もあるが、實は環境が天才を生むのだと思ふと、こんな片田舎に小堀遠州を生み出すやうな環境が、果してあつたのであらうか。後年、上方郡代となつたり、伏見奉行となつたりした事を思へば、遠州は親の時代から堺浦あたり職を奉じて居たのではあるまいか。それにしても、小堀遠州は江州が生んだ天才として一方に宗教界の最澄を挙げれば、他方に趣味界の此人を挙げねばならぬ。尾張から豊臣秀吉が生れ、

三河から徳川家康が出て居る。之等は大きな地方的の誇であるには違ひないが、世界無比の茶道中興の祖として、小堀遠州を出した事も亦、大きな江州の誇であるのだ。

(一三四) 大陸文化と相撲

相撲は野見宿禰と當麻蹶速とが、垂仁天皇天覽のもとに舉行したと言ふ話があるが、相撲の技術も矢張り、大陸から我國に傳つて來たのだ。垂仁の朝に、天日矛が渡來して、部下の陶工を近江の信樂地方に移住させたと言ふ記事がある。それだから、大陸風の陶器が、近江で焼き上げられた外に、相撲も亦、輩出して居る。後世になつては、石部、水口邊から相撲取が出て居て、宮中の相撲節には、之等の人が出掛けて行きもしたし、勸進相撲と言ふ資金募集の目的から興行させる相撲にも矢張り、此地方の人が多く出たと言ふ事だ。寶永年間に、明石志賀之助と言ふ相撲取が居た。宇都宮の奥平大膳太夫の若殿だと言ひ傳へられて居るが、之は全然、信ずるに足りぬ。並の相撲なら兎も角、資金募集の目的で興行される勸進相撲を、奥平の若殿が發起するのは頗る可笑しい。之に反して、志賀之助と言ふ名前を附けたと言ふのが、近江の舊都なる志賀に因んで附けたのであるか

ら、生國は何處であるか分らぬにしても、江州で技倆を磨いた人であるに違ひない。芝居に出る近江のお兼と言ふ大力女は、實は高島の大力子と言ふのであるが、此女も自ら相撲取にはならなかつたが、相撲の事は心得て居たものと見えて、朝廷に於ける相撲節に出張する力士に業を授けたと言ふ傳説が残つて居る。

相撲古式の家元なる吉田追風と言ふのは、元來、聖武朝に、志賀正林と言ふ人の後を繼いで出來たのだ。明石志賀之助と江州との關係は、縱令、判然しないにもせよ、志賀正林に至つては、苗字が意味する通りに、志賀の人で、朝廷の相撲節に相撲の式を定めた人であるのだ。而して其子孫が一時廢絶したので、吉田追風が之を再興したのだ。後世になつては、近江地方の文化が進んだので強い相撲は餘り出て居ないが、黒田騷動猫退治で名を揚げた小野川喜三郎は、現に近江出身の相撲であるのだ。要するに、近江地方は大陸人種の殖民地であつただけ、それだけ相撲のやうな技術までも、早くから開けて居たのだ。

昭和五年三月二十日印刷
 昭和五年三月二十三日發行
 昭和五年四月一日五版

不許複製



隨筆東海道奧付

定價一圓八十錢

著者	波多野承五郎
發行者	小竹卽一
印刷者	山内庄藏
印刷所	秀文社

發行所

東京・日本橋東京驛東口角
 振替東京七七二一〇

萬里閣書房

萬里閣書房發行目錄

石川千代松著	人間不滅	總布木版數度刷裝 四六版五四一頁	定價 二・五〇 送料 一・四〇
江原小彌太著	完成新約(上卷)	總布木版數度刷裝 四六版六三八頁	定價 二・八〇 送料 一・四〇
後藤朝太郎著	支那縦談 眠れる獅子	鳥ノ子木版數度刷裝 四六版五八六頁	定價 二・五〇 送料 一・四〇
醫學博士 岡田道一著	スポーツ衛生	總クロース金文字入 四六版二三七頁	定價 一・〇〇 送料 八〇
子母澤寛著	新選組遺聞	總布木版數度刷裝 四六版四〇六頁	定價 二・〇〇 送料 一・四〇
眞山青果著	曲 乃木將軍	總布木版數度刷裝 四六版四〇八頁	定價 一・八〇 送料 一・二〇
東京府農會技師 宮田孝次郎著	野菜の栽培調理(上)	總布木版數度刷裝 四六版五一四頁	定價 二・〇〇 送料 一・二〇
法學博士 尾佐竹猛著	夷狄の國へ	總クロース金文字入 四六版三八四頁	定價 一・八〇 送料 一・〇〇
篠田鐵造著	補幕末百話	總布木版數度刷裝 四六版五〇九頁	定價 二・〇〇 送料 一・二〇
室井さき子著	母性愛日記	總布木版數度刷裝 四六版三八〇頁	定價 一・八〇 送料 一・〇〇

萬里閣書房發行目錄

宮田孝次郎著	珍味佳味 飯と漬物嘗物三種	總布木版數度刷裝 四六版二六〇頁	定價 一・〇〇 送料 一・〇〇
酒井勝軍著	神州天子國	鳥ノ子木版六度刷裝 四六版五六二頁	定價 二・五〇 送料 一・四〇
武井武雄著	武井武雄手藝圖案集	總布金箔入上製 キク判二二〇頁	定價 二・五〇 送料 一・四〇
江原小彌太著	命經	總布木版數度刷裝 四六版五七〇頁	定價 二・五〇 送料 一・四〇
小野賢一郎著	陶器を中心に	鳥ノ子木版八度刷裝 四六版四三四頁	定價 三・〇〇 送料 一・四〇
後藤朝太郎著	支那秘談 青龍刀	總布木版數度刷裝 四六版四六〇頁	定價 二・三〇 送料 一・四〇
河原萬吉著	日本情痴集 室町鎌倉篇	總布木版數度刷裝 四六版五四四頁	定價 二・〇〇 送料 一・四〇
高村光雲著	光雲懷古談	總布木版數度刷裝 四六版七三〇頁	定價 三・五〇 送料 一・六〇
門脇陽一郎著	戲曲集 お坊ちゃん	總布數度刷裝 四六版三八〇頁	定價 一・五〇 送料 一・二〇
米澤順子著	長篇小説 毒花	總布數度刷裝 四六版五〇八頁	定價 一・八〇 送料 一・四〇

萬里閣書房發行書目録

新山虎治著	肚の人川村竹治	總クロス金文字入 四六版四二〇頁	定價 二・〇〇 送料 一・二〇
福富織部著	臍 (へそ)	總布木版數度刷裝 四六版三九〇頁	定價 一・八〇 送料 一・二〇
高岡辰子著	照葉始末書	鳥ノ子木版數度刷裝 四六版四三二頁	定價 一・八〇 送料 一・二〇
有馬純清著	心靈界の驚異	總クロス 四六版三八一頁	定價 一・五〇 送料 一・〇〇
山内侯爵家史編纂部 平尾道雄著	海援隊始末	總布木版數度刷裝 四六版四〇九頁	定價 二・〇〇 送料 一・二〇
農學士 原澄次著	應用優生學	總布木版數度刷裝 四六版六二〇頁	定價 二・八〇 送料 一・二〇
東京朝日新聞記者 田原春次著	アメリカ大學案内	總布木版數度刷裝 四六版三〇一頁	定價 一・八〇 送料 一・〇〇
伯國大使館一等書記官 野田良治著	大アマゾニヤ	總布木版數度刷裝 四六版四四七頁	定價 二・六〇 送料 一・二〇
海軍少佐 石丸藤太著	倫敦軍縮會議へ	總布オフセット刷裝 四六版五七二頁	定價 二・五〇 送料 一・四〇
九重左近著	江戸近世舞踊史	總クロス金文字入 菊版 五九〇頁	定價 五・五〇 送料 一・五八

萬里閣書房發行書目録

飯塚茂著	南洋の雄姿	總クロス金文字入 裝 四六版六三〇頁	定價 三・〇〇 送料 一・六〇
東野善一郎著	天誅組天誅録	鳥ノ子木版數度刷裝 四六版三三〇頁	定價 一・五〇 送料 一・〇〇
河野桐谷編	江戸は過ぎる	鳥ノ子木版數度刷裝 四六版五四〇頁	定價 二・五〇 送料 一・四〇
醫學博士 岡田道一著	受験生の健腦法	總クロス金文字入 四六版二三三頁	定價 一・〇〇 送料 八〇
東京府農會技師 宮田孝次郎著	野菜の栽培調理(下)	總布木版數度刷裝 四六版三九五頁	定價 一・五〇 送料 一・〇〇
星野竹里著	貯金王ニコく成功譚	總クロス金文字入 四六版四二一頁	定價 一・五〇 送料 一・〇〇
東日新聞記者 和田邦坊著	漫畫探訪	鳥ノ子木版數度刷裝 四六版三五二頁	定價 一・五〇 送料 一・二〇
横山貞雄著	人間大倉喜八郎	鳥ノ子木版數度刷裝 四六版三七七頁	定價 二・〇〇 送料 一・二〇
東日新聞社會部長 小野賢一郎著	明治大正昭和	總布木版數度刷裝 四六版五九八頁	定價 二・八〇 送料 一・六〇
柳宗悅著	工藝美論	鳥ノ子木版輕裝 四六版一一〇頁	定價 一・五〇 送料 六〇

595
239

萬里閣書房發行目錄

伊東忠太著 工學博士	山路愛山著 山路愛山選集 現代金權史 第一卷	山路愛山著 山路愛山選集 第二卷	山路愛山著 山路愛山選集 第三卷	法學博士 信夫惇平著 明治秘話 二大外交の真相	柳原白蓮著 筑紫集	櫻井大路著 高木乘著 人相の秘鍵	子母澤寛著 新選組始末記	酒井勝軍著 橄欖山上疑問の錦旗	理學博士 石川千代松著 人間
鳥ノ子木版六度刷裝 四六判五八〇頁	脊皮クロリス金字入 四六判七三六頁	脊皮クロリス金字入 四六判七二六頁	脊皮クロリス金字入 四六判七五四頁	總クロリス金文字入 四六判五二八頁	鳥ノ子木版廿度刷裝 四六判五四〇頁	總クロリス金文字入 四六判四四四頁	鳥ノ子木版八度刷裝 四六判四三四頁	總クロリス金文字入 四六判四四四頁	總布木版五度刷裝 四六判五三〇頁
定價 三・〇〇 送料 一・四〇	定價 三・〇〇 送料 一・六〇	定價 三・〇〇 送料 一・六〇	定價 三・〇〇 送料 一・六〇	定價 二・〇〇 送料 一・二〇	定價 二・〇〇 送料 一・二〇	定價 二・〇〇 送料 一・二〇	定價 二・〇〇 送料 一・二〇	定價 二・〇〇 送料 一・四〇	定價 二・五〇 送料 一・四〇

後
重
虫

5年 4月 28日 174

○	○	安詳	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	—		○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

調査済

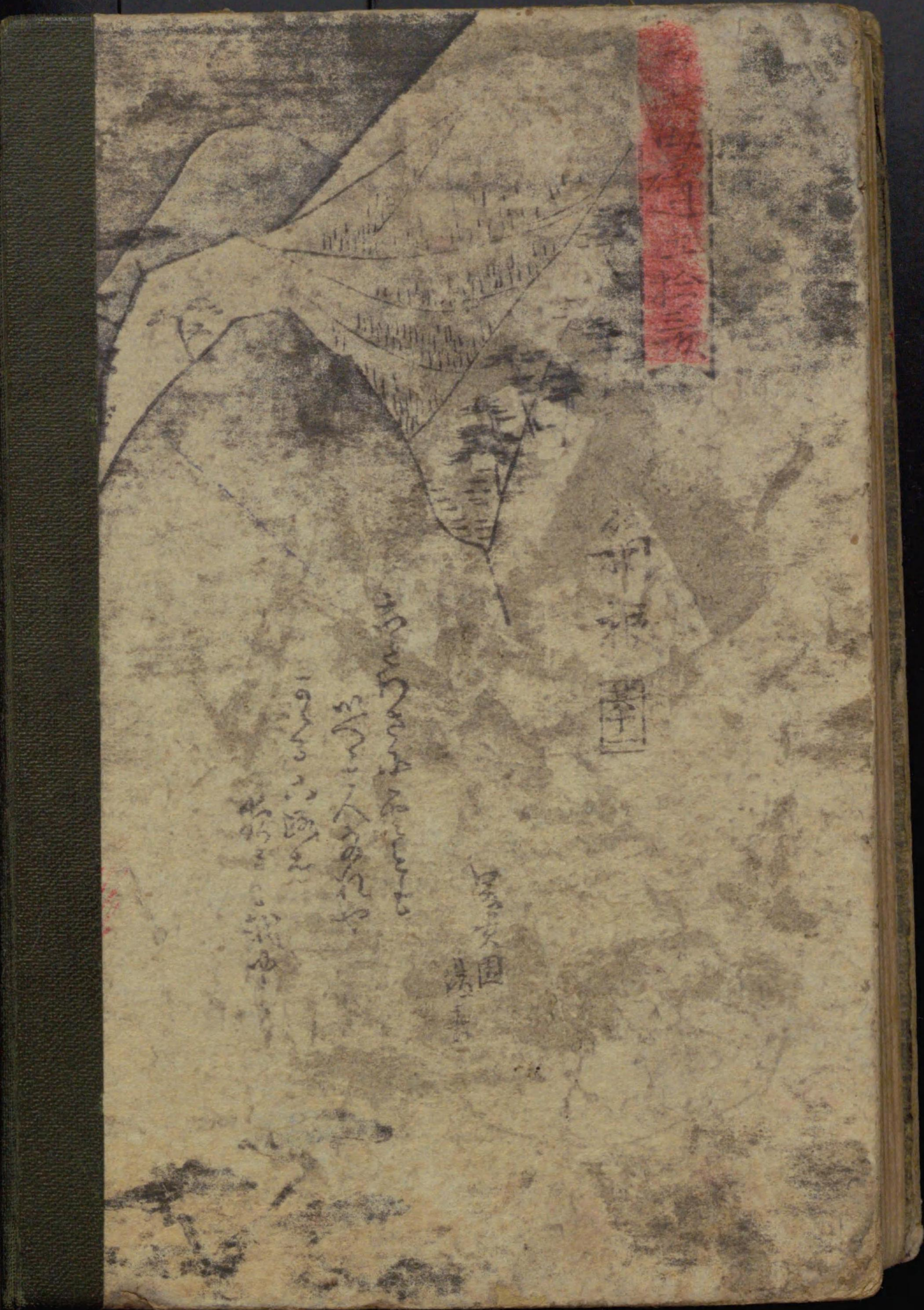
595
239

高の名跡
目録
吉原
氏記



廣島



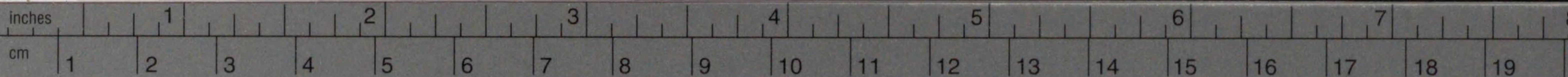


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

